資料4

令和７年度第１回地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業検討会
令和７年度助成事業中間報告に係る質疑応答

一般社団法人 ａｒｉ

［熊谷委員］
かかりつけスタッフへの研修は行っているか。

［団体］
2 回の面接、2 時間の研修を行っている。初めての活動の際は、先輩スタッフが同行する体制をとっている。

［千葉委員］
事業が発展しており素晴らしい一方、団体の代表者には、医師を目指すという自身の本分があると思う。学業に影響の出ないよう、無理のない範囲で活動を継続していただきたい。また、本事業は「課題調査検証助成」で採択されている。すでに課題調査の範囲を超えて実践の領域に踏み込んでいるように見受けられるため、課題の調査・検証という観点をしっかり踏まえていただきたい。

［団体］
次年度以降、現場の責任者は私ではない方に任せるつもりである。
また、児童精神科医の先生ときょうだい児の保護者へインタビューすることも予定しているため、きょうだい児が抱えている葛藤に加えて保護者の悩みも明らかにしながら、事業の成果に反映していく。

［笹井委員］
きょうだい児の自己理解や自己肯定感の向上など、効果測定が非常に難しい取り組みである。今後調査結果をまとめる際には、定性、定量の両面からアプローチするなどぜひ工夫してほしい。

［団体］
保護者の方から見たこどもの言動、こどもから見た自分自身の言動の 2 つの側面から、効果測定していきたいと今のところ考えている。

［柴田委員］
例えば東日本大震災で遺児支援をしている「仙台レインボーハウス」の取り組みは、本事業における効果測定の参考になるかもしれない。また、支援の実施前と実施後、それぞれアンケートを実施すると、支援の効果が測れるのではないか。

［団体］
今後の活動に反映したい。

［佐藤委員］
家庭を訪問する頻度について伺う。月に 1 回の場合、事業期間を通しても数回にしかならないが、きょうだい児にどれほどの影響を見込んでいるか。

［団体］
我々の事業の最終的な目標は、きょうだい児がスタッフに「また明日ね」と言える関係性を築くというところ。ご指摘の通り、月に 1 度は訪問したいところだが、現状そこまで手が回っていない。今年度はとりあえず、きょうだい児がスタッフへ「また来月ね」と言えるような頻度で訪問したい。その先は、きょうだい児が自分の周囲の人たちと（自己開示できるような）関係性を築いてもらうことが最善と考えており、今後、家族の交流会などを開催していきたい。

NPO 法人 UBUNTU、一般社団法人 MOTTO

［千葉委員］

今は１名の就労者のサポートを行っているが、今後、対象者が増える見込みは。

［団体］

見学者含めて２名ほど申し込みがあるが、ヘルパーが確保できていないので、希望者には待っていただいている状況である。

［千葉委員］

利用者やヘルパーを増やし、シェアオフィス事業を広げるというよりも、今回の取組みのような事例を仙台市に広めていくことで重度障害者が働ける環境を作っていってもらいたい。

［佐藤委員］

本事業は、シェアオフィスという点で非常に独自性が高い福祉サービスである。シェアオフィスだからこそできる取り組みについて教えていただきたい。

［団体］

企業が障害者を受け入れる場合、障害の程度や種類に合わせて設備を整える必要がある。一方、シェアオフィスでは玄関から入口までスロープが設置されており、車椅子での移動することが可能になっている。企業がこのような設備を整えるのはハードルが高い。企業からは、自らのオフィスで障害者に仕事をしてもらうのは難しいが、設備の整った別の場所で作業してもらえるのなら仕事の発注は可能と聞いており、実際に飲食店からの受注につながったことが成果として挙げられる。

［佐藤委員］

障害者がシェアオフィスで １ ヶ月ほど研修を受けた後に企業のオフィスで仕事をする働き方をすることも可能、という説明があったかと思うが、シェアオフィス内だけで完全リモートワークも可能という認識で正しいか。

［団体］

その通りである。シェアオフィスで働いている障害者は個人事業主なので、在宅ワークも可能であるが、シェアオフィスは働く場と生活の場を分けることができるので、日常生活との切り替えができるという点に価値がある。また、地域の方は重度障害者でも外に出て働けるとは思っていないので、就労者が外に出ていくという点も（障害者理解推進の観点から）良いことである。個人事業主はそれぞれやっている仕事は違うが、同じ空間で仕事を体験できるシェアオフィスというモデルが本人たちにとって良いのではないかと思う。

［柴田委員］
現在はシェアオフィスを整備するための費用を助成金から捻出しているが、今後助成金を活用できない状況となった場合にどのようにシェアオフィスを運用しようと考えているか、また、今後何が必要になってくるか伺いたい。

［団体］
今回のシェアオフィスの事業を通して、実証事例が十分に確保できていると実感している来年度は、実例や情報をまとめたウェブサイトを作成して広報活動を行っていきたい。広報のイベントを 3 月に予定しているので、活動を通して多くの関係団体や企業に認知してもらいたい。
また、企業が重度障害者の雇用を視野に入れた時に、この事業が実例になり、重度障害者受け入れの窓口として社会にも広がっていけるとよい。シェアオフィスのメリットとして家賃をシェアできることも挙げられるので、家賃をみんなで払って仕事も充実させていく一つのモデルを確立したいと考えている。

宮沢根白石線連坊小路エリア高架下活用検討協議会

［柴田委員］

商工会や町内会、児童館、大学、地域のボランティアチームなどが一緒に取り組んでおり、まちづくりの基本が踏まえられている。高架下という新しい場所を団体がどのように活用していくか、今後も期待している。10 月 22 日に開催したイベントの内容について伺う。

［団体］

イベントは、キッチンカーや雑貨屋が出店したもの。当日は 10 時から 13 時まで開催し、230 人ほどの参加であった。8 月に開催した時は 350 人ぐらいであったが、今回は平日の昼開催のため人数が少なかったように思う。参加者はこどもたちからお年寄りまで幅広く、一番多い年代としては 30 代から 40 代であり、70 代以降の方も来ていただいた。次回の開催日について質問をする方もいたので、皆さんにイベントは楽しんでいただけたと捉えている。

また、夕方ぐらいに行った時に、小学生が友達同士で集まっている様子を見かけた。公園とは違う、こどもの集まることができる新たな場所となっている。

［柴田委員］

課題調査検証助成事業であるので、事業を積み重ねながら、どのような形で高架下を活用するのが良いのかという課題が明確になってくれば良い。

［熊谷委員］

私も町内会の一員であるが、コロナ禍を期に多くのイベントがなくなってしまい、元に戻すのが非常に大変であると感じている。この事業についてもゼロからスタートしていると思うが、イベントを運営する実働部隊である町内会の方たちの理解をどのように得たのか。また、新しい取り組みを始める時にどのような工夫をしたか。

［団体］

協議会自体が立ち上がったのが令和 5 年度。当初は、地域に新しく道路ができることに対して不安を抱えている方もおり、協議会では「どうしたら連坊が良くなるか」という危機意識を持っていた。もともと連坊地区ではお祭りが盛んに行われていてイベントが好きな人達が多く、新しい取り組みに対し様々意見を出してくれる地域性があるように思われる。協議会のメンバーは頻繁に顔を合わせていて、作業部会も 2 週間に 1 回というペースで集まっている。

イベントを開催するにあたって工夫した点については、今後整理していきたい。

［熊谷委員］

不安が原動力になるということを肝に銘じた。私も自身も町内会のメンバーと何回も会う

ようにしたい。

［笹井委員］
高架下の最大の利点は、屋根がついている場所でイベントを開催できることである。ぜひ他のイベントも誘致して事業を進めていただければと思う。
高架下は、多くの人が収容できるスペースがあるか。

［団体］
小さい体育館並みの広さはある。

［笹井委員］
火器の使用も可能か。
［団体］
今までのイベントでは使っていないが、11 月 8 日に予定しているイベントでは消防署に申請して許可を取っている。

［笹井委員］
幅広く集客し、商店街や地域の活性化を目指していただければと思う。

［団体］
イベント時には区役所の道路課に全面的にバックアップいただいており、ありがたく思っている。協議会として、道路占用許可の申請フローなども整理している。
イベントを 2 回行っているが、高架下は地域の人たちが使っていける地域資源だと思う。連坊地区だけでも 14 の町内会があるので、町内会もしくは商工会が持ち回りでイベントを行えば地域活性化につながっていく。イベント開催時に必要となる手続きについては整理できていないので、課題を検証していく中で明らかにしていきたい。

学校法人菅原学園、国立大学法人東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター

［柴田委員］

高齢者の生きがいづくりに、この事業が寄与していると良いと思った。

昨年度の中間報告や今年度の採択の際にも、事業への東北大学との関わりが分かりづらいとのことで積極的な関与をお願いしたが、今回の報告でも東北大学がどのように分析しているのか読み取ることができなかった。今年度中に分析し最終報告会で報告する予定か。

［団体］

去年の年末に参加者に対し大規模なインタビューを行い、心理的・社会的な解析を実施している。

そのような解析結果を今年度の講座に活かしていければと思っている。参加者の目的は、講座で新しいことを学びたいということもあるが、人との交流もあると思っている。習ったことを地域に、もしくは自分の生活に活かしていくという視点も考えながら事業を進めていきたい。

［柴田委員］

そのような内容も今年度中にまとめていただき、報告いただければと思う。

［佐藤委員］

令和 6 年度の講座の開催予定は 30 回と認識していたが、21 回の開催になった理由を教えていただきたい。

また、令和 7 年度の開催回数を増やす予定はあるか伺いたい。

［団体］

当初はオリエンテーションも 1 回と数え、講座と合わせて全 30 回と考えていたが、各講座の冒頭にオリエンテーションを行った関係上、回数が減った。その上で全 24 回のプログラムを組んでいたが、開催人数まで到達しなかった講座が 3 回あった。インフルエンザなどで体調を崩される方がおり、その結果 21 回の開催となった。

令和 7 年度の対策としては、一番寒い時期の 1 月後半を避けて講座を行うなどしていきたい。

［熊谷委員］

受講者がどんな媒体で講座を知ったかということは分かるか。河北新報にも広告を出されているようだが、他の広告との差別化をする工夫などはあるか。

［団体］

広告は受講者から知人への口コミなどで広がっていったようだ。また、広告としては、「河

北ウィークリーせんだい」での掲載を中心に行った。

［熊谷委員］
高齢者向けの講座ということだが、参加者の年代は限定しているか。

［団体］
当初は高齢者向けで考えていたが、フラワー講座では 40 代、50 代の参加者が多かった。世代間交流も考えていたので、事業を進めていく中で大人の講座と言い換えたりもしていた。40 代から 80 代までの方が受講しており、平均すると 60 代くらいである。

［熊谷委員］
仮に受講者が多かった場合に、年齢が高い人を優先することはあるか。

［団体］
申込者全員に受講いただいている。フラワー講座は定員 20 名に対して 40、50 名集まることがあるが、午前と午後に分けて実施する工夫をした。参加者に午前受講か午後受講かの希望を取るなどして調整し、申し込みは断らないようにしていた。調整すると最大でも 70 名程度までは対応できる。年齢だけで断るということはせず広く募集をしていきたい。

［熊谷委員］
講座は、高齢者向けの内容なのか、それとも若い世代の人が学ぶような内容を高齢者に限定して行うのか。

［団体］
当初は高齢者向けの講座内容を考えていた。しかし、高齢者からどのようなことを学びたいかアンケートを取り、その内容を反映させた講座のチラシを作ったところ、比較的若い世代からも反響があった。

［千葉委員］
報告書では令和 6 年度前期分の記載しかないが、何か意図があるか。

［団体］
令和 6 年度後期の実績は報告資料に記載し忘れてしまったが、参加人数は前期より倍くらいになっている。

［千葉委員］
次回報告いただく際は 1 年分の実績をお願いしたい。
今後の講座の実施見込みはどうか。

［団体］
受講者数は 300 名ぐらいの登録をいただいている。人気の講座は引き続き実施し、そうではない講座は改善を加えたい。特にフラワー講座については令和 8 年度も継続して実施する。

［笹井委員］
今後の展開について伺う。地域に出向いた講座を検討していくうえで、「この団地は高齢化が進んでいる」、「この団地は独居率が高い」など地域の実情に沿った計画や戦略があるか。

［団体］
調査段階だが、長町に関して、あすと長町周辺は若年層が多く、長町駅の西側は高齢者が多いと認識している。長町で施設を管理している団体の方とやりとりをして、高齢者が多い場所で講座を実施できないか打ち合わせを行った。泉区においても長町同様、話は進めているが、なかなか協力が得られない状況である。

［柴田委員］
本助成事業は、地域づくりに資する取り組みであることが重要。当初、団体としても、講座で得た学びを受講生が地域に還元していくことを事業の謳い文句にされていたように思う。地域に出向いて講座を開催するのも良いが、地域での新しい取り組みの始まりに受講者が寄与できたかどうかについても追っていただきたい。

［団体］
ご指摘の通り、カルチャー教室だけで終わらないようにしたい。受講者が学んだことを地域貢献につなげていただけるよう、受講者の内発的な動機づけにも着目していきたい。今後は、どうすれば少しでも利益が出せるかということも考え、受講者の作品の展示などを通じて他の人への共感に結びつけていければ良いと思っている。

株式会社杜設計、株式会社コンパス・ファクトリー

［千葉委員］

「木のおもちゃひろば」のボランティア参加者は、どのようにして集めたか。

［団体］

仙台市教育局の学校規模適正化推進室や宮城大学の教授に相談したほか、プレーパーク活動をしていく中で知り合った大学教授にアプローチするなどして集めた。学生ボランティアについては、経済局が様々なインターンシップを募集していたのでそこで申し込みを受け付けた。結果として、約 50 名のボランティアを集めることができた。

［笹井委員］

非常に良い取り組みであるが、事業を自走化させるには現状では厳しく、仙台市や他団体のスポンサーなどの協力が必要不可欠である。今後のアプローチや展開を教えていただきたい。

［団体］

イベント会場をアエルにしたことで、大きな経費が掛かるため、参加費を 1 人あたり 300 円徴収することにした。ご指摘の通り事業の持続性を考えると、応援していただいている方や事業を知っていただいている方からお金を集めながら実施するのが良いと思った。

［熊谷委員］

「木のおもちゃひろば」では大工さんがいろいろと指導してくれているようだが、本職の大工さんは団体に所属している方か。また大工の育成に関して何か考えていることはあるか。

［団体］

住宅のメーカーである杜設計と、個人事業主の棟梁で構成された団体である「みや・だいく」がペアになって、大工の育成活動を行っている。「みや・だいく」には 30 代から 40 代の大工が 5、6 人所属していて、我々コンパス・ファクトリーとしても大工がいなくなることに危機感を持っていたため、協力者となってもらった。

一般社団法人定禅寺通エリアマネジメント、アサヒユウアス株式会社

［佐藤委員］

ブランディングに関して、年齢層が高い方をターゲットにされていると思ったが、その理由や方針があれば教えていただきたい。

また、「定禅寺ストリートビール」は、ケヤキがビールの製造工程で使われているということでよいか。

［団体］

ターゲットとしている年齢層が必ずしも高いというわけではなかったが、ご指摘いただき、そのように見えるということが分かった。定禅寺通りに親しみを持っている方や日頃足を運んでいる方に、若い方が少ないという現状があるが、団体としては若年層にも届けていきたい。

また、「定禅寺ストリートビール」は、ケヤキの剪定枝をチップ化したものを麦芽の燻煙過程で使っている。

［笹井委員］

計画ではタンブラーを 1,000 個売るということになっていたが、現状 433 個と目標に届いていない。定禅寺通り周辺では「バンバル仙台」や「立町たちのみ」など様々なイベントがあるが、そのようなイベントと連動、コラボする企画は検討しているか。

［団体］

タンブラー単体の販売は「バンバル仙台」で行っている。また、数は少ないが店舗販売もやっている。本来であれば複数の店舗で本事業を認知していただき、タンブラーをイベントに取り入れていただけると良いと考えている。「バンバル仙台」や「立町たちのみ」のイベント関係者とは日頃からやりとりしているので、今後取り組みを広げられるように話をしたい。

［笹井委員］

ユーメディアが開催するワインのイベントである「バンバル仙台」は、参加者がワイングラスを購入する仕組み。参加者に協力してもらい、エコなタンブラーならほかの人に比べて多くお酒を注いでもらえる、といった交渉や取り組みを広げていっていただければと思う。

［柴田委員］

元々定禅寺ストリートジャズフェスティバルで配布されていた「手づくりミニガンザ」がなくなり、その後どうなるのかと思っていたが、「JSC ガンザ」として復活したことは喜ば

しい。地元の方に愛されるような物になれば良いと思っている。来年度以降の事業イメージが現時点であれば教えていただきたい。

［団体］
ジャズフェス実行委員会と「JSC ガンザ」を販売した所感であるが、リバイバル前の製品を知っている方からは過去の経緯などご指摘いただけた。しかし中には製品のストーリーを知らない方もいて、来年は改善していきたいと思った。また、「JSC ガンザ」を使って楽しむ場のイメージが湧きづらかったので、事前 PR はもっとやっていくべきであった。

NPO 法人災強のすけっと、黒松町内会

［笹井委員］

黒松町内会から集まった参加者の数は想定より多かったのか少なかったのか、伺いたい。

［団体］

土曜日開催なので一定数以上の参加者数を見込んでいたが、習い事やスポーツをしている方が多く、集客が厳しいと思い、途中から児童館との共催のような形になった。児童館に通っているこどもたちが来てくれたから形になったように思う。今後は、児童館と初めから共催すれば、30 人から 40 人の規模で開催できると思っている。今回、参加者が 10 人まで届かなかったが、町内会の事業としては十分な形にできた。

［柴田委員］

仙台市内では、地域主催の社会学級や PTA 活動が盛んで、市民センターや児童館で色々な館長達が集まって研修会なども行われている。そのような場で事業の告知や宣伝をすると、かなり良い反応が得られると思う。来年度に向けてできるだけ早く手順書の改定作業を行い、でき上がったら宣伝の場を設定していただくとより良いと思う。

［団体］

承知した。ぜひそのように進めたい。

［千葉委員］

助成金の額に対して使用金額がまだまだ少ないが、事業は順調か。

［団体］

ご指摘の通り、計画の半分にも満たない金額しか使っていないのは事実である。今後「防災アドベンチャー」を広めるための説明会に力を入れていきたいと思っており、説明会のセッティングに残りの金額を使う予定である。当初、人件費を 50 万円から 60 万円近くで設定していたが、学生が無償で協力してくれる場合が多いため予算を使い切れていない。

［熊谷委員］

最終的な目標は、マニュアルを作るということか。

［団体］

マニュアルを作り、説明会を実施するというところまで実施したいと考えている。実演は地域の方にやっていただきたいと思っている。

［熊谷委員］
そのマニュアルは、地域の規模に合わせて使用可能か。

［団体］
団体としては、できるだけ単位町内会で行ってもらいたいと思っている。「防災アドベンチャー」は、避難所となる学校から小学生の足で徒歩 20～30 分程度の場所で行うことを想定しているほか、各地域の地区防災マニュアルを改定する時にも実施していただきたいからである。また、防災イベントを開いて終わりではなく、こどもたちの意見を自分たちの地域の防災マニュアルに落とし込んでもらいたいと考えているが、大規模なエリアで「防災アドベンチャー」を行うと、それぞれの町内会の特徴や特性が考慮されない恐れがある。ご指摘の意見を参考に、町内会の規模に合わせた「防災アドベンチャー」も考えたいと思う。